主観性の現象学的場所論へ向けて

――レヴィナス『全体性と無限』とハイデガーの『アンティゴネー』読解――

村上靖彦

本稿の目的は、主観性を世界の外に位置づけることにある。現象学的視点から見た世界は、言語以前の現象、つまり生の自然という側面と、言語に代表される様々な象徴制度 institution symbolique という側面からなる。普段私たちが経験しているのは、言語によって分節され、制度化された秩序ある世界の姿であり、生の現象という層は特殊な現象学的還元によってのみ明らかになる次元である。本稿では、この生の現象という原的な次元へと遡行する特殊な現象学的還元の作業は行わず、制度の層と原的な生の現象の層の二層構造を、すでに与えられたものとして前提としたい。

そうすると、もし主体性が世界の外に定位されるのなら、それは、この二層構造の外、ということになるだろう。現象と制度の外にあるのだから、これは存在者ではないものだろう。このような外とは何であるか確定し、その世界への関係を問うことが本稿の課題である。この課題のために、レヴィナスの『全体性と無限』とハイデガーの『形而上学入門』を用いたい。一見すると全く共通点のない、あるいは対立すると思われている両著作であるが、最終的には、同じ主体生成の構造を語っているということが確認されることになるだろう。

1　『全体性と無限』における主観性の場所

（家の創設）

レヴィナスは、象徴活動以前の生の現象を、元基あるいはアペイロンと名付ける。『全体性と無限』によると、人間の最も原初的な世界経験は、元基の享受である。日常的な志向的活動、言語的に分節された能動的活動は、ある種の現象学的な発生の視点、全てこの享受の次元を基点としているのである。つまり、『全体性と無限』の第二部では、享受から言語へ、あるいは元基から分節された世界へと向かう、ある種の発生的現象学が行われているのである。問題なのは、生の現象の

経験という次元から象徴界への移行は、連続的に成し遂げられるものではないということである。そのためにはいったん生の現象から身を引き離し、世界の外部、非場所といえるような位置に立つ必要がある。この物理的な空間に設定することができない、位相論的な外部を基点として初めて、人間は言語を使って現象を分節し世界に変容しうるのである。つまり言語を持つ動物になるのである。レヴィナスが家、あるいは住居と呼ぶ次元は、この元基からの距離であり、志向的な活動の基点であるような外部のことである。

> 家の根源的機能は、建物の建設によって、分離された存在に方向を与えたり、場所を発見したりすることではなく、元基の充溢と縁を切り、この充溢のうちに非場所（ユートピア）を開くことである。この非場所において、「私」は、我が家に滞在しつつ自己を集約する。[…] いうなれば、私は諸元基から単に分離されているだけではない。分離は労働並びに所有を可能ならしめるのだ。(1)

家とは現実的な家ではなく、超越論的な主体の構造であり、現象の経験から一歩距離を置くことのできる可能性である。もしこの家と呼ばれる次元がなかったら、主体はあまりに直接的に無秩序な世界に無防備にさらされることになる。ある種の分裂病の経験で観察されるように、無秩序な突発事の嵐の中で立ちすくむことになる。家のおかげで、主体は押し寄せる現象に対して距離をとり、労働や言語によって秩序づけることができるようになるのである。つまり、家は、非言語的な世界経験である享受とも、言語活動（労働、所有、労働）とも距離をとった第三の次元、経験の外に位置する非場所であるのだ。

補足的な事柄だが、この非場所は、女性的なものとの関係によって開かれるとされる。

> 現前することが隠れつつあるために不在でもあるような〈他人〉、それが〈女性〉である。内面性の次元を開く最大限の歓待的な迎接がこの〈女性〉の現前を基点として成就される。女性は、集約し収容することの条件、〈家〉の内面性及び住むことの条件なのである。(2)

家と女性との本源的な結びつきとは、経験的には理解しやすいものであるが、現象学の言説によっては説明できないものであろう。これはある種の超越論的仮象といえる。

（家における言説の導入）

家は主体の象徴的活動（所有、労働、表象）の基点となる。

家という安全な場所、自分自身の懐を確保することによって、事物を支配し、所有することが可能になるのである。ここで重要なのは、他者が私の所有に反対することで（これが言説の始まりである）、贈与と交換、コミュニケーションの次元が開かれるということである。家を基点とした世界の創設は、他者との関係を不可欠の契機としているのである。

> 諸価値の獲得、使用、操作、手による製造は所有に、掌握し獲得する手に、我が家へと導く手に立脚している。[…] 即自的に存在しないが故に［つまり所有されているが故に］、事物は交換可能であり、交換可能であるが故に、事物は比較可能である。このときすでに、事物はその自同性そのものを喪失しており、だからこそ、貨幣へと反映させることも可能となるのだ。[…] 事物は何ら抵抗することなく獲得される。が、他の所有者たち（所有者とは所有不能なものの謂いである）が事物の獲得に抗議し、このように抗議することで逆に、所有というものを是認する場合もある。[3]

事物がそれぞれ意味を持ち、経済活動のネットワークにはめ込まれている世界は、家と他者との関係を前提とするのである。こうして、女性との関係によって家という主体性の次元が開かれ、家は抗議する他者との関係を経由することで、社会的関係に開かれることになる。社会的関係の次元とは、交換と言語による世界の分節、法的正義を設定する次元である。家を基点として、他者との関係の中に入ることで、原的な現象を世界に分節し、住みうるものにすることができるのである。

他者と出会うことで成立する、社会的関係の次元とは、同時に内面性が確立され、意識が成立する次元でもある。意識は自己完結的で、独我論的なものではなく、他者との関係を前提とするのである。[4] 意識とは「まだ生きている」という時間（の意識）であり、危険から距離をとることであり、究極的には死の延期である。[5] 元基の直接的享受は不安定で危険なものであり、現象から距離をとることと、危険から距離をとること、そして死から距離をとることは等価なのである。意識とは、家とレヴィナスが呼ぶ超越論的次元が、経験的に具体化したものなのである。家という主体の場によって可能になった言語的活動とは死の延期に他ならず、結局家そのものも死から遠ざかるための場であったことがわかる。[6]

しかし、こうして危険を延期するために創設された象徴制度それ自体、暴走することがある。人は制度の中で歯車におとしめられて、人間性を失いかねない。全体性の中の歯車になるのを防ぐには、全体性の外に立つ場を人間のために創設する必要がある。『全体性と無限』第三部後半の、歴史の裁き

に抗する神の裁きについての節は、全体性から離脱するための究極的なあるいは本源的な主体性の創設（高揚）を語っているのである。[7] 歴史の裁きとは、象徴制度に飲み込まれて個体性を失うことの代表例であり、神の裁き、弁明、高揚とは、制度の外に立ち、個体性を確保することである。そしてレヴィナスにとってこの高揚は、他者との倫理的な関係そのものである。つまり非場所に立つ主観性とは他者との関係である。それゆえ、『存在するとは別の仕方で』では、主観性が、同の中の他、あるいは非場所と名付けられるのである。『全体性と無限』の構造に従えば、この主体性の高揚は、自分が創設した象徴制度の秩序の外に立つ可能性であって、非言語的な自然の無秩序に対抗しているのではない。つまり、家が自然の無秩序からの離脱であるのに対し、高揚は象徴界の網の目からの離脱なのである。意識という経験的な次元における死の延期の姿は、家と主観性の高揚という二つの超越論的な外部を前提とするのである。

家とは野生の現象の無秩序から離脱した点、主観性の高揚とは象徴界の網の目、世界秩序の支配を逃れる点であることが明らかになった。しかし、レヴィナスははっきりとは述べていないが、この二点は同じ出来事の両面であるように思われる。家は、女性的な存在との親密な関係によって創設され、高揚は他者との倫理的な関係そのものである。女性との関係と倫理との違いは、本稿の文脈の中では本質的なものではない。単に、生の現象に対する距離に対しては家と名付けられ、象徴制度に対する距離に対しては高揚と名付けられるということである。双方世界の外部を創設することが本質であるゆえに、両者を区別する理由はない。『全体性と無限』においては、家を可能にする女性との関係、意識と社会制度を可能にする他者との出会い、社会制度から逸脱する高揚における他者との関係、エロス、と四つの他者関係が登場するが、この区別は思弁的に過ぎると思われる。単純に、他者との関係において、主観性が創設され、現象界からも象徴界からも離脱するのである。何事にも、つまり現象にも象徴界にも還元し得ない場において主体は創設されるのである。さもなくば、主体は現象に溶け込むか、制度のネットワークの交差点であるに過ぎなくなり、主体の唯一性というものはありえないであろう。現象学は、神秘的な融即にも、唯物論にも組みすることはないのである。

2　テクネーという非場所
ハイデガーのアンティゴネー読解

家と主体の高揚で与えられるような、主体の場、あるいは非場所は、三十年代半ばのハイデガー、とりわけ『芸術作品の起源』や『ヘルダーリンの賛歌、『ゲルマニエン』と『ライン』

においても重要な役割を果たしている。ここでは同時期の重要な論考である『形而上学入門[8]』の中にあるソフォクレスの『アンティゴネー』中のコロスの解釈を例にとってみよう。

まず、解釈の冒頭でハイデガーは、人間の本質を不気味なものUnheimlichとして定義している。この不気味なものには、二層ある。まず、「強力なもの、制圧的なもの[9]」つまり「発現して自己を立て起こすこと、自己の中に滞在して自己を展開すること[10]」としてのピュシスの力がある。次に、ピュシスに刃向かう暴力・行為性[11]としてのテクネーの力がある[12]。人間は、一方では、ピュシスの一つであり、他方でピュシスに対抗する力であるテクネーでもある。しかしここで早まって、ピュシスが元基、野生の自然の力、テクネーが象徴、言語の力だと考えてはいけない。詳しく見てゆこう。

> […] 言語、理解、気分、激情、建設などは、海、大地、動物などに劣らず制圧的な強力なものに属する。違いといえば、ただ、海、大地、動物は人間を取り囲んで支配しumwalten、支え、人間を悩まし、鼓舞するのに対して、言葉、理解、気分などは、人間が人間という存在者である以上はどうしても引き受けねばならないものとして人間の中を貫いて支配しているdurchwaltenという点にあるだけである[13]。

ピュシスには、取り囲む力と貫く力の二つがある。気をつけなくてはいけないのは、「海、大地、動物」や「言葉、理解、気分など」といった力は、そう名付けられる以前の始源的なものと考えなくてはいけないと言うことである[14]。取り囲む力は野生の自然であり、レヴィナスが元基と呼んだものの一面である。貫く力は、あまり一般的な解釈ではないが、将来象徴的な言語活動として現成化することになる原的な言語現象である[15]。

注意するべきは、言語的な力である貫くピュシスは、日常的な言語活動そのものではないということである。現実の象徴活動は、人間にとって実は異質なものである原的な言葉（貫くピュシス）を、テクネーによって統御した結果の産物である。ハイデガーにとっては言葉、気分といったものは、人間に本来備わった能力ではなく、志向性の活動によって統御されることになる言語現象の原的な姿であろう。

テクネーは、原的な言語の力でもなく、現実の象徴活動でもないのである。この点はしばしばなおざりにされている。テクネーとは、取り囲むピュシスの力と貫くピュシスの力を統御し、世界の象徴的な秩序を作り出す働きなのである。

人間が最も不気味（クノ・ハイムリヒ）なものであるのは、人間が今述べたよ

うな意味での非・故郷的（ウン・ハイムリヒ）なもののまっただ中で自分の本質に即して生きてゆくからだけではなく、人間は初めは自分の限界を住み慣れて土着的なものと思っていても、しまいにはその限界から歩みだし、そこから出ていってしまうからであり、人間が暴力・行為的なものとして土着的なものの限界を踏み越えるからであり、しかもそれを踏み越えてどこへ向かうのかと言えば、他ならぬ制圧的なものという意味での不気味なものの方向へと向かうからである。[16]

人間は、まず、最も不気味な取り囲むピュシスのただ中に自己を定立しなければならないが故に、人間に対して異質なものであるピュシスに対峙していなくてはいけないが故に、自身不気味なものである。現象の外に離脱しなくては主体は定立できないのである。次に、人間は、自分の限界、つまり住み慣れた世界の秩序をはみ出て、まだ秩序づけられていない取り囲むピュシスの方へと向かう。つまり、テクネーとしての人間のもう一つの本質は、象徴秩序の外に立つことで、ピュシスへの接近可能性を得ることにある。

至る所へ人間は自分のために軌道をつけ、存在するもののあらゆる領域、制圧的な支配のあらゆる領域へ人間はあえて進みいり、しかも進み入ると同時に全ての軌道からはじき出される。[17]

前の引用では、象徴的な秩序は故郷として前提されていたが、今度の引用からこのような秩序（軌道）も人間が創設しなければならないことがわかる。実は人間こそが決して統御しつくすことのできない[18]取り囲むピュシスを分節し、人間の住む世界の秩序へと転換するのである。この分節し変質する行為が、取り囲むピュシスへと近づくことに他ならない。しかも、このようにして創設した秩序からすぐさま人間は逸脱するのである。というのも、人間の本質は社会秩序の中に安住することではなく、決して分節され尽くすことのないピュシスを絶えず言語的な秩序へと変換し直してゆくことにあるからである。テクネーとしての人間は、秩序とピュシスの間を、はじき出されながら行ったり来たりしているのである。

つまり、主体の非場所としてのテクネーは、象徴秩序の創設と取り囲むピュシスへの接近の可能性そのものなのである。もしもテクネーがなかったら、一般に経験というものはないだろう。原的な現象を受容することも、世界秩序を作り出しその中で生きることもできないからである。テクネーとは、何らかの経験的に定義可能な行為なのではなく、ピュシスの外に立ちそれを受け止め、絶えず統御する力のことなのである。

詩人的な言、哲人的思索、建築的造形、建国の業などの暴力・行為性は、人間が持っている諸能力の働きではなく、これらの力を手なずけ調和させ、存在者をそのものとして開示させ、人間がその中に入ってゆくようにすることである。存在者のこの開示性こそは人間が統御しなければならない力であって、この力を統御して初めて人間は暴力・開示性を帯びて、存在者のまっただ中で人間自身であることができる。[19]

今度は、貫くピュシスとテクネーの関係が問題になっている。暴力・行為性、すなわちテクネーの力は貫くピュシスの力（言語、気分、造形）を統御して象徴行為（詩人的な言、哲人的思索、など）へと変容し、取り囲むピュシスを象徴的秩序、あるいはその基体となる存在者そのものへと変容し、その還元不能性を覆い隠す。存在者そのものとは、象徴以前の取り囲むピュシスが、象徴的な次元において変容された姿である。人間は原的な現象そのものには住むことができない。現象を存在者に変容することで初めて、人間足りうるのである。

このようなものとして、テクネーは人間の場所であり、かつ現象と世界の絶対的な外部、つまり非場所である。それゆえテクネーの場はポリス（場所）そしてアポリス（非場所）と名付けられる。[20] 現存在が生起する場所（ダー）であり、かつ現象にも秩序にも場所を持たない非場所だからである。世界の秩序を創設するためには、テクネーの場所かつ非場所に立たなくてはいけないのである。[21]

ということはハイデガーも、レヴィナスと同じような主体の構造を構想していたということになる。人間は、元基あるいはピュシスと呼ばれた原的な現象の外部に立ち、それに対峙して自己を定立し、世界の象徴的な秩序を創設しながらも、秩序の外部に絶えず逃れるのである。レヴィナスが家と主観性の高揚と呼んだ非場所は、ハイデガーにおいてはテクネー、アポリスと呼ばれたのである。主観性とは、原的な現象の外部に立つことで、この現象と親しみ、象徴的な秩序を創設しながらもその外部に立つ、という運動として定義できるのである。

さいごに三つ、応用的なことがらを補足したい。

一、人は自らが住む秩序を作り出すのだが、すぐにその中に埋もれてしまう。すでに創設された秩序から常に抜け出し、また創設し直す可能性が残されていないと、秩序は機械的、暴力的に働きだし、人間は秩序の中のただの歯車になってしまう。[22] これはレヴィナスが全体性、ハイデガーが後にゲシュテルと呼んだ状態である。

二、アペイロンの脆弱さと象徴秩序の中で歯車となってしま

うことに脅かされている人間は、常に死へとさらされている。[23] ハイデガーが死との近さにおける本来性を強調するのに対し、レヴィナスは死から距離をとることを問題にするのであるが、主観性創設との関係の構造は似ている。アペイロンの力の中で圧倒される危険、象徴界の中に埋もれる危険、双方が死の危険として考えられているのである。レヴィナスにとって、家、主体の高揚とはこの危険を退けることであった。ハイデガーにとってはこの危険の中で耐え抜くことNoがテクネーとしての主体の本質なのである。

三、主体の非場所の創設としてのテクネーは常にやり直さなくてはいけないものである。[24] テクネーによって秩序を創設するやいなや、人間は秩序の中にはめ込まれて自らの場所である非場所を失ってしまう。人間は常に秩序からはみ出て、決して統御され尽くすことのないピュシスの方へ向かう必要がある。非場所とは、非場所の生成そのものであるのだ。このようなテクネーの反復可能性こそが歴史の本質に他ならない。というのも、歴史とは最も根源的には人間が人間であり続けることであり、主観性の高揚あるいはテクネーこそがその都度人間を創設する運動だからである。それゆえ、アンティゴネー読解においては、テクネー、作品へとおくこと[25] が、歴史的存在と言い換えられるのである。[26] ところで、レヴィナスにとっても、例えば『他者のユマニスム』では、他者との関係が作品として定義され、この概念が後期レヴィナスの歴史概念の基本単位となる。主観性に関する本稿の論述は歴史性の問題へと開かれているのである。

こうして、主観性は世界の外に位置づけられた。但し、これは物理的な位置を持つ場所ではないし、静止したものでもない。人間以前の生の現象と人間世界（象徴制度）の間の運動として考えられるような場、現象の中にも秩序の中にも位置を持たない非場所である。問題はこの場を、ハイデガーはテクネーと呼び、レヴィナスは他者との関係であると位置づけている点である。テクネーと他者との関係を結びつける構造をさがし、その上で、歴史性の考察へと議論を進めてゆくことが、課題として残されている。

注

(1) E. Lévinas, *Totalité et infini, Essai sur l'extériorité*, La Haye, Martinus Nijhoff, 1961（レヴィナス、『全体性と無限　外部性についての試論』、合田訳、国文社、一九八九）、二三五頁、頁数は翻訳に依った。また訳は適宜変更した。

（2）同、二三三頁

（3）同、二四五頁

（4）「けれども、家に迎え入れられることで確立される所有からも解放され、諸事物をそれ自体として見得るためには、つまり諸事物を自分に表象し、享受並びに所有を拒み得るためには、私は自分の所有するものを与えることができるのでなければならない。[…] そのためには、私は私を審問する〝他者〟の隠れていない顔と出会わなければならない。」（同、二五九頁）

（5）「しかしながら、切迫は脅威であると同時に延期でもある。切迫は時間を早めると共に時間を残す。」（同、三六二頁）「意識は暴力への抵抗である。というのは、意識は暴力を予防するのに必要な時間を残すからである。自由な人間も一瞬先には自由を奪われるかもしれない。が、自由の剥奪があくまで未来の自体であると言うこと、それが自由の意味である。」（同、三六六頁）

（6）「[…] 生の不安定さを克服する住居は、生が陥りかねない最後の時の不断の延期である。死についての意識とは、[…] 死を不断に延期する意識である。[…] この延期が時間の次元そのものを開くのだ。」（同、二四九頁）

（7）「歴史の裁きは可視的なもののうちで表明される […] 可視的なものは全体性を形成するかあるいはこの全体性を目指す。可視的なものは弁明を排除する。というのは、弁明は、他ならぬ主観性の乗り越え不能かつ包摂不能な現在を全体性のうちに普段に挿入し、それによって全体性を解体するからである。」（同、三七七頁）。「死に対する意志の恐れが殺人を犯すことへの恐れに転じるとき、意志は神の裁きのもとにあるのだ。[…] 裁きにおける単独性の高揚は、裁きによって惹起される無限責任そのもののうちで生起する。」（同、三七八、九頁）

（8）Heidegger, M., *Gesamtausgabe Band40, Einführung in die Metaphysik (1935)*, Frankfurt am Main, Vittorio Klostermann, 1953 (1983)（『形而上学入門』、川原訳、平凡社ライブラリー、一九九四）頁数は翻訳に依った。部分的に訳を変更した。

（9）≪Das Gewaltige, das Überwältigende […]≫（同、訳二四六頁）

（10）同、一〇六頁

（11）「[…] 人間は自分の暴力・行為性 Gewalt-tätigkeit において、制圧的なものに対抗して力を使用するという意味においてもっぱら暴力・行為的なものなのである。」（同、二四七頁）

（12）「我々はテクネーを「知」と訳す […] 知とは存在をその都度しかじかの存在者として作品・へと・置きうると言うことである。」（同、二六一、二頁）

（13）同、二五六、七頁

（14）「「海」はここでは、ここで初めてこの語が言われたかのごとくに言われ、[…]」（同、二五三頁）

（15）もう一つ可能な解釈は、貫く力の方を象徴以前の現象ではなく、象徴そのものの力、原的な記号の力、ラカンが象徴界と呼んだものに近いものとして捉えるというものである。

(16) 同、二四八、九頁

(17) 同、二五〇頁

(18) 「知る者［テクネーを用いる者］は、秩序［取り囲むピュシス］の中へと進みいるが、［…］いつまでたっても制圧的なもの［取り囲むピュシス］を統御することができない」同、二六四頁

(19) 同、二五八、九頁

(20) 「むしろポリスとは居所であり、ダー、つまり、そこで、またそのようなものとしてダーザインが歴史的なものとしてあるような、そんなダーをいう。ポリスは歴史の居所であり、ダーであり、その中で、そこから、そのために歴史が生起する。［…］歴史の居所の中で高くぬきんでると、彼らは同時にアポリスになる。つまり都市も居所もなく、孤独なもの、不気味なもの、全体としての存在者のただ中で逃げ道もなく、また同時に規則も限界も構造も秩序もなくなってしまう。というのは、彼らこそ創造者としてこれら全てのものをその都度まず基礎付けしてかからねばならないのだからである。」（同、二五一、二頁）

(21) 裂け目 Riß（同、二六四頁）、割れ目 Bresche（同、二六七頁）といった言葉は場所と非場所の両義性を意味している。

(22) 「逃げ道がないということは、むしろ人間が絶えず自分で拓いた道へと投げ帰され、自分の軌道の上で立ち往生し、自分が拓いたものにからみつかれ、この自縄自縛の状態で自分の世界の範囲内をさまよい、仮象の中に巻き込まれて、結局存在から閉め出されるという点にある。こんな風にして、人間は自分だけの範囲内で多方向的にぐるぐる回る。」（同、二五九頁）

(23) 「［…］人間は絶えず、そして本質的に逃げ道なく死に対しているのである。人間がある限り人間は死という逃げ道のないものの中に立っている。このように、現・存在とは生起する不・気味さそのものなのである［…］。」（同、二六〇頁）

(24) 「［暴力・行為的な者］にとって没落こそが制圧的なものに対する最も深く最も広い肯定なのである。制作せられた作品を粉砕することにおいて、つまりこの作品は一つの無・秩序であり、前に述べたサルマ（糞尿の堆積）であるということを知ることにおいて、暴力・行為な者は制圧的なものをそれの秩序のままに放置する。」（同、二六八頁）

(25) 「知［つまりテクネー］とは存在をその都度しかじかの存在者として作品・へと・置き・うるということである。［…］芸術の作品が作品である第一の理由は［…］それがある一つの存在者の中で存在を現実化しているからである。現実化するとはこの場合、作品へともたらすことであり、現象（エプファイネン）するものとしてのこの作品の中で、そこを支配している発現、すなわちピュシスが、光（シャイネン）ることへと到来するのである。」（同、二六二頁、一部既出）

(26) 同、二六四から九頁